日本女子大学

国語国文学会だより

No. 38　　2008. 5

日本文学科卒業生の会

国語国文学会 平成十九年度秋季大会 研究発表・公開講演会 親睦

平成十九年度秋季大会を十一月二十四日（土）、百年館低層棟二〇七教室にて開催しました。

◆午前の部（研究発表）十時～十二時

三輪山伝承の形成 ――「針」を中心に――
本学博士課程後期一年次　岩田芳子氏

『卒塔婆小町』にみる三島由紀夫と〝俗悪〟
本学博士課程前期一年次　浅川史氏

文系論文で引用文はどのように書かれているのか
――留学生の論文作成に活かすために――
本学博士課程後期一年次　清水まさ子氏

◆午後の部（講演会）十三時三十分～十六時三十分

歌舞伎を通して見る江戸と上方
――初代団十郎から谷崎潤一郎に及ぶ
本学准教授　児玉竜一氏

人と物語
作家　あさのあつこ氏

懇親会　十六時三十分～十八時　於　ウィミン

「講演会」に思う

斉藤令子（新6回）

当代の人気作家、殊に若者に圧倒的な支持を誇るあさのあつこ氏を迎えての公開講演会とあって、例年とはちょっと違って学生会員が席を埋めた。

わかりやすい歯切れのよい語り口―親しい仲間と語り合うようなはずむことばで話される。気取らない自然体でのこの語り口が、若い人々の心に透み通っていくのだろうか。

三十分ほど経って、これからと思っていたら講演会は終了。質疑応答に移った。あらかじめ司会者に寄せられた質問を重ねて、氏の文学観、作家生活に及ぼすというもの。新しい試みで「なるほど」と楽しくもあったが、すっかりおばさんの私は、広報の一端を担った者としては、「講演会」と冠すべきではなかったのではないか…とふと思われてきた。

こうした新しい会の持ち方も含め、「公開講演会」の持ち方を、検討するときがきたのかもしれない。その意味で、大変示唆にとむ秋季大会であったと、改めて考えている。

春季大会のご案内

▼日時　平成二十年五月二十九日（木）十三時～
第一部　総会　第二部　研究発表・活動報告
研究発表題目等、詳細は四面を御覧ください。

やさしさと鋭さと

関根　緑（旧44回）

あさのあつこ先生の講演がきまってから、私は先生の作品「バッテリー」を猛スピードで読みあげ、当日を迎えた。

初めてお逢いする先生の何とおだやかでやさしい「語り口」であったか。何のてらいもないあたたかみのあるお話ぶりに、思わずひきこまれてしまった。

「バッテリー」の主人公の不敵ともいえる大胆なふるまい、ひとりよがりの度胆をぬかれるような考え方生き方、そのよこしまとも思われる「かたち」は一体何なのか、どこからきたのか、先生のお話で解明しようとした。そして、お話を伺いながら、それが次第に形を整えてきたのである。主人公のものへのこだわり、純粋とも云える「ほんね」でものを見凝めてゆこうとするひたむきな視線、そこにあるのはむき出しの自分自身。さらにその主人公は、すべての人の心に存在する人間像でもあることに気づかされた。換言すれば、この主人公と同じものが私の中にもあったのだ。それに気づいたとき、なぜかある種の安堵感をもったのである。

また先生は、ものを書くことを薦められた。書くことはその対象を細かく見凝めなければならない。それは対象を愛することにもつながってゆく。それに気づかせてくださった。鋭く奥深いものの見方、相反するものを受け入れ、相手をあたたかく包みこむやさしさ、語りかけてくださる先生の言葉の中に、心と心のつながり、あたたかみがにじみ出てくる。その鋭さとやさしさを兼ねそなえた先生のお人柄に接することのできたひとときであった。

講演会に出席して

立川和子（新1回）

秋の講演会は、あさのあつこ氏を迎えて開かれた。作家デビューして、瞬く間に、文芸賞等を連続して受賞されているが、書店の店頭にうず高く積まれている「バッテリー1～16」を初めて見て、私は、早速読み、お話を聞いてみたいと思うほど、引きこまれた。

小学校の教諭を経験されて、作家になられた方だけに、実に生き生きと少年達の心の動き、細かい変化、感情が、とてもよく書かれているが、それが巾広い年代層、特に小学生中学生を持つ年代層に、実感として支持されているであろうと、飾り気のない、わかりやすいお話振り、お人柄からしみじみ感じた。

読むほどに、聞くほどに、巾広く共感を得、絶大な支持も受けていらっしゃったことと、私もお話に引きこまれ、時間のたつのを忘れた。気持ちのゆったりしたよい雰囲気の講演会であった。

今回は「三十分の講演と、あとの時間は質問に」との御希望であったので、質問もよく出て、活発にもり上がったと思った。

・一日のことを書いてみることは一つの自分史になる。

・変わっていく自分を文章として残す。

質問に対する答として話していらっしゃったが、印象に残る言葉であった。

学生会員の方、若い会員の方の出席が多く、うれしいことであったが、もっと巾広い年代の会員の出席も欲しかったと痛感した。

講演要旨

歌舞伎を通して見る江戸と上方
――初代団十郎から谷崎潤一郎に及ぶ――

本学准教授　児玉竜一

国語国文学会の秋季大会のゲストに青木玉氏がお越し下さった時のことである。

ご講演ののち、懇親会にまでお付き合いくださった氏は、「まだまだおりたいのですけれど、大きな千松が待っておりますので、これにて」とごあいさつがあって、お帰りになった。

「千松」という固有名詞がわからなければ、このごあいさつは意味をなさない。冗談であることさえ通じない。千松とは、歌舞伎の「伽羅先代萩（めいぼくせんだいはぎ）」に登場する足利家の乳人政岡の息子。お家騒動の渦中にあって、若君毒殺をねらう敵役一味から身を守るため、政岡が手づから作るものしか口にしない若君にかしずいている哀れな子供である。

すなわち「伽羅先代萩」という作品が、ひいては歌舞伎というものが、一般に共有される知識であったときには、「千松」といえば空腹の代名詞であった。戸板康二の伝えるひとつばなしだが、千松という名の芸者が、お座敷に出て名のったあとに微笑して、「おなかが空いておりますの」とつけ加えたところ、「そりゃいけない、なにか取ってあげよう」と言ってしまった客は、洒落のわからぬ野暮天として嗤われた。

さてそこで青木玉氏の「大きな千松」というのがすでに語義矛盾で、一匹狼の群れとか、男らしい女方というに等しいおかしみを含んでいる。そのうえで、大きなといわれるからには子供ではなく大人、おそらくはお夕飯をお待ちかねの夫君かと拝察する。「夕食の用意がありますから」といってしまっては、身も蓋もないが、玉氏はご自分を政岡に見立て、夫君を千松に見立て、お二人の関係を母と子のようなものですと見立てることで、笑いにくるんでみせ、かつは母が用意をしないとご飯も食べられない子供ですので早く帰ってやりませんと、という引いたごあいさつで、お帰りにならなければならない理由をほのめかされたのであった。

このお気遣いとご事情と、それをくるんでみせる愛嬌と諧謔と、すべてが「千松」というたった一語の固有名詞にこめられている。この「千松」という一語の示すところを、その由来、背景、用例、来歴、すべてを知ることではじめて、たった一言のごあいさつの意味がわかる。

演習をはじめとする教場で、われわれがめざしているところは、これなのであると思う。たった一文の意味を理解するために、言葉の背景を知りつくす。逆にいえば、その知りつくすことを怠れば、たった一文といえども理解しつくしたとはいえないことになる。

しかし、それにしても平成の世にいきなり「千松」とは、さすが戦前の帝国劇場で書き下ろされた新作中随一の当たり狂言「名和長年」の作者露伴のお孫さま、というところだが、近世芸能の歌舞伎を専攻とするわたくしなどは、むしろ、ほんの近い過去まで日常生活のなかにいきていた固有名詞が、みるみる息絶えてゆくありさまの方に関心がある。

わたくしの子供自分、うちの祖母は悪さやいたずらを「ゴンタ」と呼んだ。「ゴンタしたらいけません」、と叱られたわたくしは、そのゴンタが、「義経千本桜」三段目の「すしや」の主人公、いがみの権太であることに、中学生になって遅まきながら気づいたのであった。親のすねをかじりながら、博奕、強請、かたり、あらゆる悪事に手を染めた権太は、改心して親の主筋を救おうとするが、むなしく空振りして命を落とす。その愛嬌ある小悪党ぶりが、悪さの代名詞になったものらしい。

歌舞伎のなかにあって、日常語となった言葉は少なくない。黒幕、差し金、どんでん返し、黒衣、花道、幕開き、幕切れ、幕の内……。だが、固有名詞は、より豊穣な背景をもちながら、忘れ去られるのは、いやまして早い。

現代生活のなかで忘れ去られるのは仕方ないとあきらめるにしても、それが日常生活のなかに生きていた時代の言葉を読むにあたって、それが忘れ去られるのは、ちと悲しい。歌舞伎にかかわる固有名詞がわからずに、谷崎潤一郎が読めるはずはないと、近代文学には素人ながらわたくしは信ずる。……と思いながら『春琴抄』の新潮文庫などを手にとると、わたくしが高校生で買った版の注釈などスサまじい。たとえば「三勝半七」とは、紀海音作の浄瑠璃の主人公なり、とある。引いた事典の一番最初にそう書いてあったのだろうが、谷崎の時代に最も流布していた三勝半七は「艶容女舞衣」の「酒屋の段」であることは、歌舞伎の側では初歩の常識に属する。注釈者三好行雄先生、さては学生に下調べをお任せになったか、などと御忖度申し上げたりするところである。

固有名詞をないがしろにして読みは始まらない、と思うのだが、世には「普遍的な」「理念」や「法則性」好きがおられて、話芸の伝承に関する座談会なんぞに出た折にも、「どうしてこんなに固有名詞ばかりが乱れ飛ぶの？」と詰問されたことがあるが、哀れなものだ。固有名詞への偏愛を欠いたところには、文学も史学も成り立たない。

（以上は話の前後のみを抜き出して、新たに一文としました）

国語国文学会春季大会のご案内

▼日時　平成二十年五月二十九日（木）
十三時より
▼場所　八〇年館八五一教室
事前のお申込みは不要です。直接会場までお越しください。
▼第一部
総会　十三時～
▼第二部
活動報告・研究発表　十三時半～十五時

・活動報告
自主ゼミ
「近代自主ゼミ活動報告」　藤田沙矢香氏（学生）
「古筆の会活動報告」　森田直美氏（卒業生の会）
・研究発表
「リュブリャナ大学における日本語史に関する授業の報告」
佐藤麻衣子氏（本学大学院博士課程後期二年）
「『紫式部集』表現と構成―伝本の比較から―」
會和由記子氏（本学大学院博士課程前期一年）
「『三人吉三廓初買』の考察―因果応報と悪―」
福田百合子氏（新制58回生　平成19年度日本文学科賞学術賞受賞）

〈ご報告〉

―平塚らいてう生誕一二〇周年を記念して―『青踏』と世界の「新しい女」たち

さる三月八日（土）、日本女子大学文学部文学研究科と「新しい女」研究会の主催による、「―平塚らいてう生誕一二〇周年を記念して―『青踏』と世界の「新しい女」たち」と題する講演と研究発表の会が、百年館低層棟五〇五・五〇六教室を会場として開かれました。後藤祥子学長をお迎えし、多くの方にお越しいただいたこの会で、研究室から卒業生の会を支えてくださった渡部麻実氏、溝部優美子氏が研究発表をなさいました。

○名簿の作成を進めています

前回「卒業生の会」の名簿を作成してから、かなり時間が経ち、新しい会員も増えてまいりました。市町村の合併に伴う地名変更もあり、会では現在、新しい名簿の作成を進めております。お名前・ご住所・電話番号等が変わられた会員の方は、お手数ですが、会までお知らせくださいますよう、お願いいたします。

○会計より

以前にもお伝えいたしましたが、会費の納入率の減少が続いております。皆さまの会費によって維持されている会の活動にも、印刷物の発行回数が少なくなる等の影響が出ています。

昨年お送りした振込用紙による平成十九年度分の会費の振込も、まだ受け付けておりますので、いま一度ご確認のほど、よろしくお願いいたします。

○卒業生の会よりのお願い

会員の方にお送りしている郵便物が、宛先不明で多数戻ってきております。中でもとりわけ、若い会員の方宛のお便りに、お届けできないままになっているものが目立ちます。ご住所が変わられた折には、卒業生の会へもご連絡をいただけますよう、改めてお願い申し上げます。

○編集より

「会のお手伝いをしてくださる方募集」の記事を「たより」に掲載した効果か、昨年の秋季大会前後から、委員に名乗りをあげてくださる会員が増えてまいりました。今年度は、常任委員の顔ぶれが大きく変わることと思います。

この「たより」の編集も、長い間同じメンバーで続けてまいりましたが、次の号からは新しい担当者にお渡しする予定です。

ささやかな「たより」ですが、何かしら皆さまにお届けできるものがありましたら、幸いです。

二〇〇八年五月十五日
発行・日本女子大学日本文学科
国語国文学会卒業生の会
〒一一二-八六八一　東京都文京区目白台二-八-一
日本女子大学　日本文学科内